



題字上：良運丸 下ヨイチ運上家の場所請負人・林長左衛門の兄弟が所有していた船。(小樽市総合博物館蔵)
船模型 500石積弁財船の1/3サイズの模型。(よいち水産博物館に展示)

高野 宏康 博士(歴史民族資料学)

小樽商科大学

グローバル戦略推進センター研究支援部門

地域経済研究部・学術研究員

小樽市歴史文化基本構想策定委員会調査部会長



北前船と後志 【一】

～余市・古平の北前船の遺産～

一 北海道から見た北前船

今年(平成二十九年/二〇一七)四月、北前船寄港地・船主集落が「日本遺産」に認定されたことで、あらためて北前船が注目されるようになっていく。高田屋嘉兵衛の辰悦丸の回航事業(昭和六十一年/一九八六)や、復元北前船「みちのく丸」の来航(平成二十二年/二〇一〇)時には道内各地でも様々な関連イベントが開催されるなど、以前から北前船に関心を持つ人は多かったが、後志と北前船の関わりについては、これまでまとまったかたちで紹介されたことはほとんどなかった。

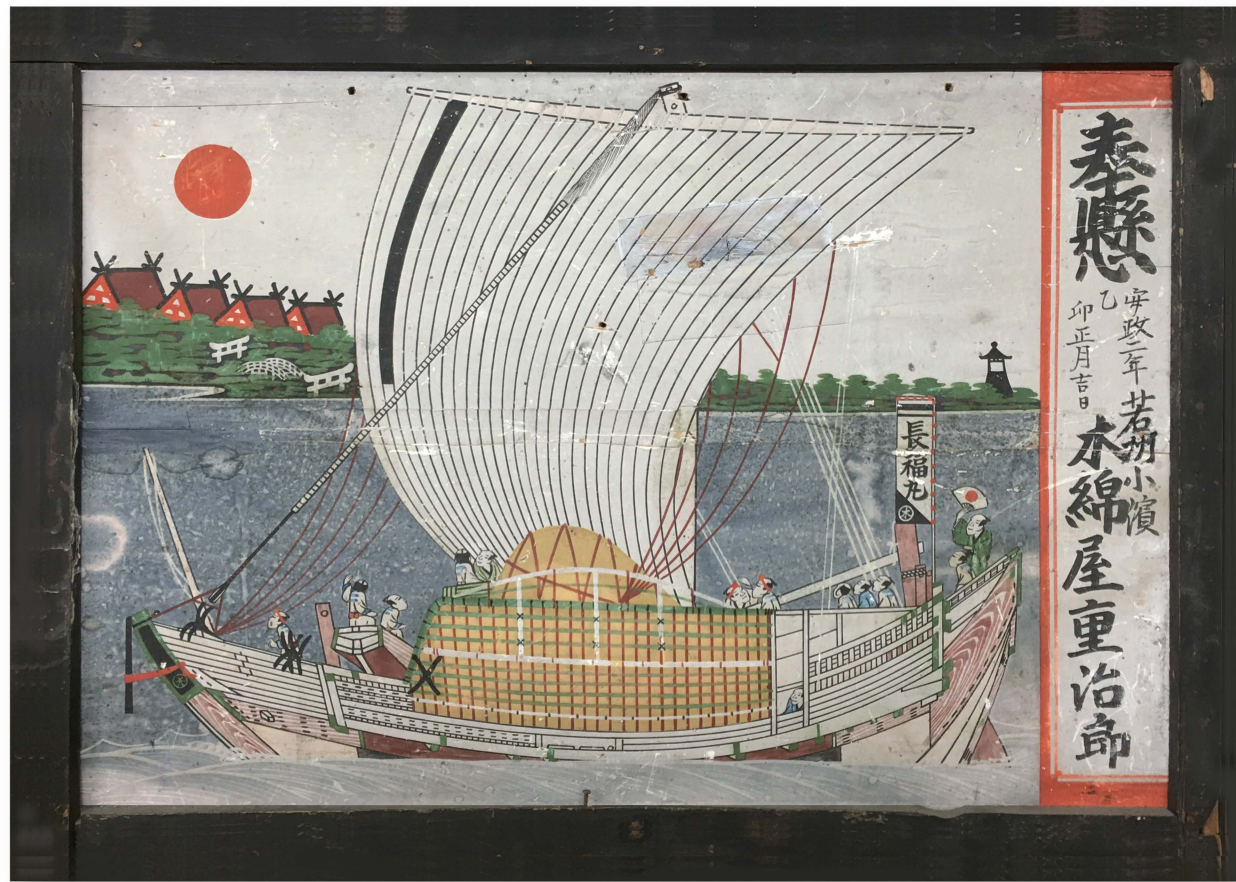
北前船にとって北海道は決定的に重要な場所であるが、これまでの研究は本州からの視点で中心で、北前船の意義は道民自身にも充分理解されてきたとは言えない。北海道と北前船との関わりという点、近世から密接な関係を持つ道南の三港、すなわち江差、松前、函館が挙げられ、続いて小樽が言及されることが多いが、その性格の違いについては必ずしも明確ではなかった。最近の研究では、近世の物

流や交易に大きな役割を果たしたことに加え、明治以降の北海道開拓を支えた生活物資を運搬、人や文化の移動などの点での北前船の意義が指摘され始めており、小樽は新たな役割を担うようになった北前船寄港地として発展していったと言える。

道南と小樽の間に位置する後志地域には、独自の性格と意義があり、様々な北前船のゆかりがのこっている。今回はその点に着目して、余市と古平にのこる北前船の遺産を紹介してみたい。

北海道と北前船の関わりを考える際、注意しなければいけないのは「北前船」の呼称である。「北前船」は、もともと大阪や瀬戸内海の人たちが、日本海方面に向かう船や、船乗りを「北前」と呼んでいたことに由来するが、各地に様々な地域呼称がみられ、「北前船」の呼称を好まない地域もある。

北海道では北前船の代名詞となっている「弁財船」や「千石船」と呼ばれることが多いが、北前船には西洋型帆船や和船と



「長福丸」の船絵馬 安政2年(1855)正月奉納。奉納者は「若州小浜 木綿屋重治郎」 寸法405×575



諸国御客船帆形 明治29年(1896)年。(よいち水産博物館に展示)

の「合の子船」など様々な船種が含まれることから、現在では一般的に「北前船」と呼ばれるようになっていく。北前船の定義には諸説あるが、近年では日本海を通じて北の海を往来

する航路と、買積という経営形態を重視するようになっており、各地の北前船に共通する点と各地の特徴を共に理解することが重要である。

二 余市の北前船の遺産

小樽市総合博物館が所蔵している良運丸の写真は、船の細部が鮮明に写っている写真として知られるが、この船は、下ヨイチ運上家の場所請負人・林長左衛門の兄弟が所有していたものである。撮影された場所は新潟であると伝えられている。下ヨイチの場所請負人は、文政八年(二八二五)に藤野喜兵衛から竹屋長七(初代林長左衛門)となり、以後場所請負制度廃止まで四代にわたって林家が担った。林家は手船を所有し、様々な交易を営んでいた。北前船研究では北陸の北前船主が重視される傾向があったが、近年は場所請負人の北前船交易の意義についても指摘されるようになってい

石川県白山市の藤塚神社には、ヨイチ場所産のイナウが用いられた「威徳丸イナウ奉納額」が奉納されている。威徳丸は加登屋甚兵衛がヨイチ場所の運上家を介したアイヌとの交易で入手し、地元に戻った後に奉納したものと考えられる。和人とアイヌとの間に北前船を通じたつながりがあったことがわかる貴重な資料である。

モイレ山の頂上にある、よいち水産博物館には、船模型、船絵馬など、様々な北前船関連資料が展示されている。入館するとすぐ巨大な北前船の模型があり、非常にインパクトのある展示となっている。この船模型は、五百石積の弁財船の三分の一サイズの模型で、材料は実際の弁

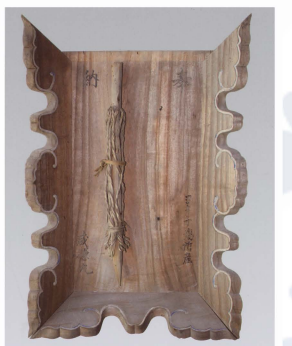
いたことが伺える。

旧ヨイチ運上家に隣接する茂入神社に奉納されていた七面の船絵馬は、現在、よいち水産博物館内に展示されている。茂入神社は、文政三年(二八二〇)から場所請負制度廃止の明治二年(一八六九)まで、余市場所請負人であった竹屋林家が弁財天を祀った神社である。



茂入神社 下ヨイチ運上家に隣接。場所請負人の林家が弁財天を祀った神社。船絵馬が7面奉納されていた。

「長福丸」の船絵馬は、安政二年(一八五五)正月に奉納されたもので、奉納者は「若州小浜木綿屋重治郎」である。絵馬の船の背景には、海上安全の守護神である住吉大社の社殿と高灯籠が描かれている。木綿屋は、若狭小浜(現・福井県小浜市)の北前船主・志水家の屋号で、幟の印は同家の家紋である。重治郎は、小樽に倉庫を建設した右



威徳丸イナウ奉納額 明治元年(1868) (石川県白山市・藤塚神社)

財船と同様に、スギ、ヒノキ、ケヤキ等が使用されている。酒井久蔵氏が設計・製作を担当した。船模型は船を新造する際に造船所から船主に寄贈されるもので、その多くは実物の二十分の一となっており、これだけのサイズの船模型は貴重である。

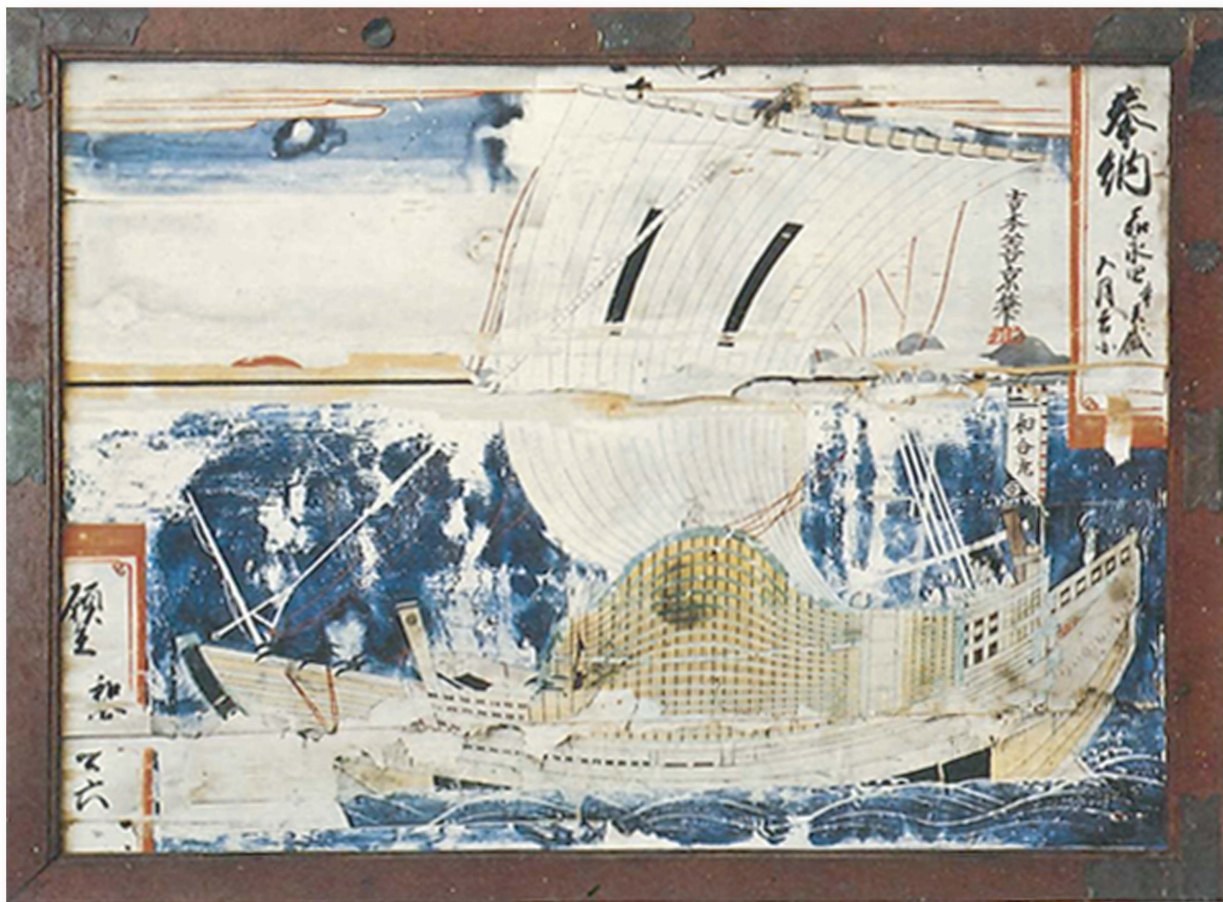
同館に展示されている、諸国御客船帆形(明治二十九年／一八九六)は、取引先の船の帆の特徴を一覧にまとめたもので、帆の形状に切り取って貼り付けられた紙の内部に、船名、船主名、船長名、入港日、屋号、積載量、反数(帆の大きさ)等が記載されている。商店は船が入港すると帆印を確認し、船に応じて迎え支度をした。明治後半にも各地から北前船が入港して

近家や中村家の出身地として知られる河野村(現・福井県南越前町河野)出身で、同村の八幡神社には重治郎が安政二年に奉納した船絵馬がのこされている。

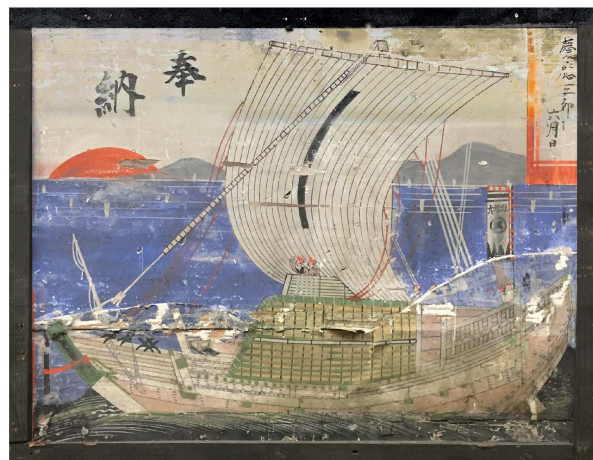
「退福丸」の船絵馬は、慶應三年(二八六七)六月に奉納されたもので、奉納者名は記載されていないが、帆印や幟の意匠から木綿屋と同様、小浜の北前船主・古河屋が所有する船であったことがわかる。道内には古河屋所有製の船絵馬として、増毛町の海音寺に奉納されていたものがあり、現在、北海道博物館に保管されている。

「喜栄丸」の船絵馬は、文久三年(二八六三)年に奉納されたもので、奉納者名は「加州橋立浦 大家喜栄丸兵助」と記載されている。橋立(現・石川県加賀市橋立町)は、小樽倉庫を建設した西出孫左衛門、西谷庄八らの出身地で、小樽の大家倉庫を建設した大家家は加賀市瀬越町であるが、この船絵馬を奉納した橋立の大家家とは別系統である。

以上のように、余市の船絵馬は北陸の北前船主たちが奉納したものが多く、船絵馬はこれらの船主たちとヨイチ場所請負人の林家との関係の深さを示す貴重な資料と言える。



「和合丸」の船絵馬 嘉永4年(1851)9月に厳島神社へ奉納。後志最古の船絵馬。運上屋岡田家の所有船と推定。作者は三代目吉本善京と推定。寸法730×987



右：「喜栄丸」の船絵馬 文久3年(1863) 8月奉納。奉納者は「加州橋立浦 大家喜栄兵助」。寸法340×490



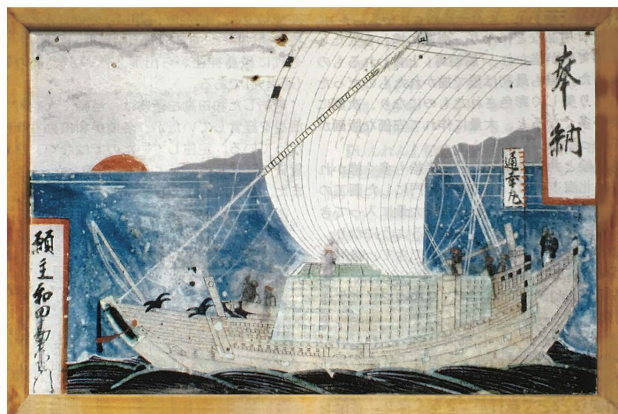
左：「返福丸」の船絵馬 慶応3年(1867)年6月奉納。奉納者名は記載されていないが、小浜の北前船主・古河屋の所有船と推定 寸法345×450



古平港 年代不明。多数の船舶が停泊している。(古平町教育委員会蔵)



船筆筥 (古平民俗資料館蔵)



「通奉丸」の船絵馬 明治7年(1874) に恵美須神社へ奉納。奉納者は和田勘左衛門。寸法426×587

三 古平の北前船の遺産

古平港はかつて多数の北前船が入港した港であるが、その様子を伝える資料はほとんどのこっていない。古平町教育委員会に保管されている一枚の古平港の古写真(年代不明)からわずかにその一端が伺える。平成二十四年(二〇一二)に閉校となった旧古平高校の校舎を活用した古平町高齢者複合施設内に開設された、古平民俗資料館(古平町大字浜町八九三番地)には、古平町民から寄贈された多数の民俗資料のなかに船筆筥や錨、船模型など北前船関連資料も含まれており、北前船とのゆかりを知ることができる。

ちなみに、現在、北方資料館(根室の北海道立北方四島交流センターニ・ホ・ロ内)に展示されている高田屋嘉兵衛の辰悦丸の船模型は、昭和四十五年(一九七〇)に古平町の古平造船所の船大工・笹山徳一氏が製作したもので、古平の造船技術の高さを評価され製作を依頼されたといわれる。

「和合丸」の船絵馬は、嘉永四年(一八五二)九月に厳島神社

に奉納されたもので、明治以降の船絵馬は西洋から輸入されたウルトラマリンで着色した船絵馬が鮮やかなブルーで着色されているものが多いが、この船絵馬は暗めの藍色系であることが特徴的である。帆印などから古平の場所請負人・岡田家の持ち船の和合丸であることが確認できる。船絵馬の作者は、落款から大阪の絵師・吉本善京であることがわかるが、年代から三代目であると推定される。三代目吉本善京は大量の船絵馬の需要に対応するために船体部分の描線を版画化し、貼り付けた上で着色する方法を考案したことで知られる。保存状態の悪い船絵馬の着色が剥離しているのはこの着色方法による。

厳島神社は、もともと岡田家が宝暦元年(一七五一)に創建した恵比須神社であり、当時は弁財天も合祀していたが、明治十年頃、神仏分離により厳島神社に改称した。同神社には三面の船絵馬が奉納されている。

「通奉丸」の船絵馬は、明治七年(一八七四)に恵美須神社に奉

納されたもので、奉納者の和田勘左衛門は、当時、古平の入船町で鰺漁場を営んでいた人物である。定住していたのではなく、漁場を賃貸で営んでいたようで、鮭建網も営んでいたことが知られている。

【参考文献】

『平成29年度春季特別展

北前船と日本海海運』

(石川県立博物館、2017年)、

『北前船と小樽・後志』

歴史文化のルーツを訪ねて』

(小樽商科大学グローバル戦略

推進センター地域経済研究部、

2016年)

土屋周三「江戸期と明治期の北

前船〜北海道視点から〜」

『北前船にかかる論考・考察集』

(全国北前船研究会、2016年)

『ふるさと通信〜古平〜』

(第17号、2015年10月)、

中西聡『北前船の近代史

海の豪商たちが遺したもの』

(成文堂、2013年)

林昇太郎「積丹半島に現存する

絵馬について」『北海道開拓記

念館研究報告』13号(1993年)

牧野隆信『北前船の研究』

(法政大学出版会、1989年)

越崎宗一『新版北前船考』

(北海道出版企画センター、

1972年)